ふるさとの誇り 152

博レポート

引札（ひきふだ）は伝える

―明治時代の商い―

引札とは江戸時代から大正時代頃まで商店や問屋などが広告を刷物にして配布したもので、新聞広告などの新たなメディアが定着するまでは、広告の花形として用いられていました。

新年の挨拶を兼ねた引札のデザインは、商売繁盛を願ってえびすや大黒などの七福神や福助、縁起物とされる富士山や松、鯛などが好まれ、当初は江戸時代の多色刷りの浮世絵版画である「錦絵」の技法を取り入れた華やかで美しいものでした。

引札の最盛期であった明治・大正時代には、「暦」や「郵便料金表」などの実用的な情報のほか、文明開化による日本の近代化を象徴する新しい職業や女性の最新ファッションなども絵の中に取り込まれ、石版多色刷りを使って、より鮮明な画像を大量に制作することができるようになり、庶民へと広まっていきました。

上に示した引札を読み解くと、明治時代の南アルプス市を舞台に活躍したさまざまな商店やその活動の一端を知ることができます。これらの引札は、長年収集されてきた個人の方から「ふるさと〇〇博物館」の趣旨に賛同されてご寄贈いただいたもので、全部で十六点あります。

引札には小笠原や飯野、西野などの地区にかつてあった商店の名前が見え、菓子店が多く、他には魚商、呉服太物商※、足袋商などがあります。

現在、ふるさと文化伝承館では寄贈されたほぼ全てを展示しており、来館者同士で昔を懐かしみながら思い出話が花開くこともしばしばです。

実際に引札にある店主のお孫さんがお越しになり、多くのお話を伺うこともできています。このようないわばファミリーヒストリーをつないでいくと、当時の地域の様子が見えてきます。引札が地域の物語を紡いでくれているようです。

明治期に花開いた市内の商人たちのエネルギーを感じていただければ幸いです。

写真・文　文化財課

屋号
カネサト
（家の呼び名）

販売商品
呉服太物商※

見本帳で図柄を選んで、自分の商店の情報を後から印刷したんだよ。

暦
一年間目に付くところに貼ってもらえるように、実用的な「明治36年略暦」が後付けで貼り付けられている。この引札が配られた年がわかる。

広告主・店名
新津助次郎

所在地
「中巨摩郡大井村」この他、「小笠原宿」や、「榊村」などかつての呼び方や地名を知ることができる。

図柄
恵比寿と大黒の楽しそうな宴席に、鯛や富士山など縁起のよい福々しいグッズが散りばめられている。
新年のあいさつを兼ねた引札では、めでたいものの代名詞というべき「富士山」「初日の出」「鶴」などが江戸時代から盛り込まれてきた。
また、明治時代には、憧れの職業であった郵便配達員や最新ファッションなど、時代性が加えられていく。

印刷所
明治36年の夏に、大阪市東区備後町にあった古島竹次郎が発行した図柄であることがわかる。
古島印刷所は引札の専門印刷所として全国的に有名であった。

女学生のファッションは当時憧れの的なの！

※太物：「ふともの」と読み、絹織物に対して、綿織物や麻織物のことを称した。

中巨摩郡小笠原二丁目／金丸商店
今も土蔵の屋根に同じ屋号の瓦が輝いている。しかし表示されているような商品を扱っていた記憶はほぼ伝えられていない。

榊村上宮地／横内安平
上宮地での足袋商については詳細はわかっていない。引き続き情報募集中。

中巨摩郡西野村／笹本永作
地域の方のお話では、菓子屋を営んでいたのは大正時代までだが、昭和の中ごろまでは「菓子屋」と呼ばれていたとのこと。

広告主である新津助次郎さんのお孫さんである助弘さんが来館され、なんと助次郎さんの姿が彫られた胸像をお持ちくださった。しかもこの胸像は市内在住の木彫の名人の作であることが判明。このようにつながってゆくことが「ふるさと〇〇博物館」の利点のひとつである。

引札にみられた、当時の商品

【商業種】
菓子８・呉服太物商１・魚商１・足袋商１
【いわゆる「よろず屋」さんが販売した商品】
酒・煙草・缶詰・乾物・米・食塩・石油・肥料・糸類・綿・荒物・呉服・太物・陶器・学校用品など

引札だけでなくて、商店に関連する民具も展示しているのよ。行かなきゃ！

ふるさと文化伝承館

【〇博トーク】
「引札がつないだ明治期の南アルプス市」
令和２年３月14日（土）
13：30～15：00頃
・引札解説
・商店の思い出トーク
・ギャラリー解説
お問合せ／電話　282-7408

令和元年度第２回テーマ展

ふるさとの新春を彩った引札

4月19日まで開催中